

夏 日 漫 筆

曾 根 保

一、山牛蒡

「おい、あの何さかいふ……それ、山牛蒡か……あれ、また、あんなに滅多切りにしちや可哀さうぢやないか。あれだつて相當な花が咲くんだらう。何もかも矢鱈に切りまくるんぢやないよ。」

「私ぢやございませんです。家主さんが來まして、黙つて切つて行つたんです。」

「あの親爺、しやうがないね。毎日する仕事が無いもんだから……餘計なことはかして……おい、木戸はいつも締めこくんだぜ。」

「はい、今朝、ゴミ屋さんが來まして、一寸開けたんですが、もうその間に……。」

「切るにしても、殘酷に、あんなに丸坊主にしなくたつてよささうなもんぢやないか。第一、みつこもないよ。すぐ眼の前にヌート大きな幹だけ一本突立つて……。」

「私が、そんなに切つてしまつては、ご申しましたら、かうした方が良くなるんです、花のためです、ご家主さんは言つてました……。」

「折角大きな葉が出て、見よくなつたと思ふに、黙つて人の家へはひつて來て……。ほんたうに厭な親爺だね。」
私は、眼付のよくない家主が大きな庖丁を提げて裏木戸からヌートはひり込み、バサ／＼と、如何にも氣持よささうに山牛蒡の葉を切り落して行つた有様を描き乍ら椽に立つてゐた。私の子供——もう十三になる。早いもので本誌に發表させて貰つた對話を書いたのは四年前だが——憎らしい家主の切り落して行つた、自分の顔の三倍もある山牛蒡の大きな葉を一枚側に置いて、ケイテイ物語を讀んでゐる。私がブツ／＼言つてゐるのなんかまるで耳にもはひらぬかのやうに讀み耽つてゐる。私は自分の「感情の浪費」には少しも考へ及ばず、むやみに、おせつかいな家主を罵倒し續けたのであつた。

それから一週間経つた。早いもので山牛莠は、またスクスク伸びた。伸びたばかりでなく、破れ塙根をすつかり被ふてしまふほご左右に擴がつて行つた。私は繁茂の盛な有様に驚嘆した。四季折々に庭の眺めは多少變化する。君子のやうな松の木も庭を支配して立つところがある。つまらぬ雜草が床しい風情を添へて、吾々の注意を喚び起すところもある。今は山牛莠が花盛り。白い細い花が房をなして垂れてゐる。華美なところがなく、如何にも野育ちの感が強い。私は今年始めて山牛莠に接するのだが、人工的な庭には不向きであらうし、又人によつては、不作法なまでに伸び擴がるこの花を憎むかも知れない。しかし、街の花屋で賣つてゐないやうな花、カット・グラスにはおさまりかねるやうな花も亦私の心を惹く。

或る朝、聲の恐しく悪い苗木屋が朝顔を賣りに來た。子供が欲しいと言ふので出てみるに、蕾を澤山につけ、一二輪、白や紫の花が縁の葉の上に明るく浮いてゐるやうに咲いてゐた。二鉢買つてやるに、苗木屋は左手に鉢をもち、右手の指先で、惜し氣もなく蕾のある莖まで剪み切つてしまつた。側で見てるた近所の人が、マア、残酷ですね、私には可哀さうで、そんなには出来ません、と言ふに、苗木屋は、かうしないに大きい花は決して得られませんが、放任しておくと大變です。思ひ切つてかういふ風に取つてしまふ

方がいゝのですよ、なほも残酷に扱つた。私は二鉢様に列べて、山牛莠を見た。ムザムザ丸坊主にした家主はこの手を知つてゐてやつたのだな、もし私が刈りもせず、伸びるがまゝにして置いたなら、今頃は二階の窓近くまで伸びてゐるかも知れない。が、程よく今のやうに破れ塙を飾ることはなかつたであらう。「そんな残酷なことも、子供を大きくする上に、時には肝要なことであるに違ひない。目の前のことしか見えず、やたらに「感情の浪費をした自分をばつかしく思ひ、側にある子供を見て、さて、この山牛莠をさういふ風にして美しく、健全に伸びさせたらよいか、を考へてみた。

二、母親の感情

私は、昔から、さいつても中學を出てからだが、家庭教師をよくやつて來た。食ふに困つたからである。滿十五年教へた一家もある。恩給がつきますね、冗談を言つたこともあつた。主として中學生や高校生だが、中にはもう高等官何等さいふ人もあるし、又たまには、不出來の者もあつた。大學を出て立派な社會人になつてゐるのを見るに嬉しいものである。まご／＼してゐるに、教へ子の方が所謂偉くなるのであらうが、それが又嬉しいものである。

この間、今教へてゐる中學五年生の母親が見えて色々話

をしてゐるうちに、こんな會話が交はされた。

「お蔭様で大變成績もあがりまして、第一本人が、樂になり、自信がもてるやうになつたを申して居ります。」

「いや、去年の今頃はひきかつたですから、骨が折れました。本人も随分苦しかつたでせう。」

「はい、實は、御教授を願つて一ヶ月餘りした頃、半泣きになつて、かう英語ばかりで時間をこつたら、數學なんかちつとも出來やしない、數學の方を少しやらうと思ふに英語の方で叱られるから、僕はもう止めたい、さかう申しまして、側で見てるましても、まあ本人の頭が悪いせいですか、お宅に伺はせていたゞく日には食事もしない程一生懸命で、さても可哀さうで……」

「いや、中學三年間意けた罰ですよ。四年生で三年の本が苦しいなぞ言つてはお話になりません。」

「で、八、九、十三三ヶ月、本當に寝る時間も少くし、さうも瘦せてゆくやうで、私もつい、心配になり、そんなに苦しいのなら、暫く休ませていたゞいたら、ご主人に申しましたところ、何を言つてゐるのだ、出來ないから苦しいのだよ、出來れば面白くなるよ、そしたら實力もつくのだ、今やめてしまつてさうするさいふのだ、馬鹿なことを言つちやいかん、先生にはちやんごお考があるのだから、お任せしておけばいい、出來ない子供に餘計

な同情はよしなさい、さうしては子供を悪くしてゐるぢやないか。かう言はれまして、私も子供に、もう少し、もう少し、辛抱させましたら十一月頃から、お母さん、英語もわかるやうになつたよ、ニコニコするやうになりました。全く先生のお蔭で……」

私は永年の經驗から、正しいと思ふ方法で、子供の將來、目的を中心として教へてゐるので、所謂素人の言葉には容易に耳をかさないことにしてゐる。しかも母親は、子供の教育では、父親よりも、遙かに責任を感じ、熱心に見えるかもしれないけれども、日常、さかく感情の浪費が多くて、これがぎれだけ子供の生長を害してゐるか量りしれない。

三、新聞の婦人欄

私は、新聞の婦人欄に注意する。男である私は女の人の心理がわからなくて困ることがある。だから機會のある毎に自分に不足してゐる知識を得たいと願つてゐる。しかし、婦人雜誌までのぞく暇は無いから、新聞紙上で婦人の論説を聽いてゐる。今朝出てゐるのに次のやうなのがある。題は『教壇の姿勢』といふのである。議論はさかく一方的になり易いから、こゝに全文を掲げさせていたゞき、お互に考へてみたい。

「傷ついた兵隊さんに乗せた汽車が、都會の或る小驛にこまつた。ミ、そのすぐ傍に建つてゐる小學校は丁度授業の最中らしくて、開け放された窓から、小さな顔が一齊に汽車に向けられたかきみるミ、子供の心は一度に傷病兵の白衣にこぼれるやうに注がれた。つひには背のびをし、たまりなくなつて窓ぎはにじり寄り寄る子も見えた。先生もひき横目で汽車を見たが、しかし、教壇の姿勢は少しも崩れず、授業はこも角續けられてゐた。やがて汽車は再び動き、兵隊さんは手を振りながら遠ざかつた。丁度この汽車に乗り合せてゐた私は、思はず「あーあ」ため息をついてゐた。何さいふ寂しいものを見たものかと思つて。

この先生の一時間の教授細目には、成程少しも狂ひはなかつたにちがひない。だがその内容は、生徒の頭の上をかすめて通つてしまひはしなかつたか。冷靜なボーズを崩さない先生は、教員室に於けるよき教師の定義にはつればしなからうが、この時の生徒は寂しい人間の姿を軟かい心に刻まれはしなかつたか。もつこの時、思はず子供と一緒に窓により「お歸りなさい、ご苦勞様」を叫ばずにゐられない先生だつたら、このひきまきの熱情は、未來の何十人の生徒の人間性をこんなに豊かにする事が出来たらう。教育の革新は、案外こんな所に根ざしてゐるはしないだらうか。」

これを一讀して、尤もなこきこ一應は同感を寄せる人も

一四

少くないであらう。筆者丸岡秀子氏と同じく「あーあ」を嘆息を洩されるかもしれない。しかし、この人は教壇の人の立場を考慮せずに物を観てゐる。極めて偏頗である。いやしくも大新聞婦人欄に定期的に原稿を賣つてゐる人が、そして「女の立場」を受持つインテリが、かういふ風に感情に馳せて、教育の神聖を少しも認め得ないで居り乍ら、「教育の革新は、案外こんな所に根ざしてはゐないだらうか」なきこ仰しやる様では、知識階級に棲息するこ自認する女性ほき危険なものはないさいふここになりはしないか。教育あるすべての女性がこんな風だきは決して思はない。しかし、かういふ感情の浪費者が指導的立場に立つやうなここがあつたさしたらそれこそ日本女子教育は大變である。この婦人の觀察力はすばらしい。しかしこれは眞の觀察力ではない。極めて皮層なもので、教室の中の教師の眼の動きまで見てゐる程な眼力に對しては、私など近眼者の羨望已まないものがあるが、物の觀方はたしかに間違つてゐる。學校が停車場にそんなに近く建てられるさいふここ、それ自體も一つの教育上の問題であるが、何か十分な理由があるのであらう。だが、この場合、近くにあつて、傷ついた兵士が見えるからさいつて、學童が授業を中止して「お歸りなさい」を言ふここが妥當であるかさうか。休みの時間ならいざ知らず。又恐らく、この驛には度々かうした事が

あるのであらうから、學校當局も皇國の爲に傷ついた兵士に對して無關心ではあらう筈がない。工場や田井で働いてゐる人達が仕事の手を休めて、出征兵士を心から感謝の敬意を以て送つてゐるが、この學校の教師も同じ氣持で手を舉げて傷ついた兵士を迎へたい、又生徒にもさうさせたかつたであらう。それが出来ない立場にある事をこの筆者は見逃してゐる。教師も、聲を出して「御苦勞様でした」と言へたら、それだけスガ／＼しい心持になれるこゝか。それが出来ないこゝろに、この教師の苦しきがある。又それと同時に嚴肅な、そして楽しい持場がある。眼の動きだけ見て、心の中の感慨無量を察し得ないこゝの人こそ近眼である。又兒童が「御苦勞様でした」と叫んだとしたら、勇士達は何も感じたであらう。大人みたいな「お世辭」を言ふよりも、君達は教室では脇眼をふらず、學業に専心してくれと言ふであらう。それに教師まで一緒になつて、窓際へ出て來ようものなら、二階からも、隣からも何百といふ小さな顔が出て、恐らくその日の授業は駄目にならう。一度や二度ならそれも結構、三日や十日にそれを繰返してゐては困りはしないか。教室は神聖な道場である。戰場である。親が窓の外に立つたからさいつて勝手に出て行くこゝは許されない。この婦人が教場さいふものに對する認識が全く無いこゝを遺憾に思ふ。従つて子供の教育に於ける學校と家

庭さいふものに就いても正しい認識は持つてゐないであらう。勇士達が開け放たれた教室の窓から、教師を中心に「はい、先生、々々」熱心に勉強してゐる生徒を見たら、恐らく勇士達は「それでこそ」心強く感じるだらう。自働車や電車の運轉手でも自分の持場を眞面目に守つて此事に従事してゐるのは尊い。無駄口をきいたり、きよろ／＼する者に對しては不安なこゝろか惡意さへ生じて來るものだ。人間が眞面目に持場を守るほゞ正しいこゝは無い。敬禮の一番やかましい軍隊でさへも、持場についてゐる者は、場合によつて敬禮をしなくともよい。否してはいけないのだ。私は、この「冷靜なボーズを崩さない」教師に對して同情こそすれ、この婦人のやうな輕蔑の言葉はさうしても出せない。「熱情」の浪費は、ある場合には危険であるを信ずる。

四、あゝ、母よ！

「海の荒鷲」得猪治郎中佐は四月二十六日、敵の空軍基地孝感飛行場で自爆、皇國の爲に華ミ散つた。八月十五日讀賣新聞紙上で母堂は亡き中佐の追憶を語つてゐられる。私は之を讀んで泣かすにはゐられなかつた。今度の事變で、新聞を見て泣いたこゝは幾度もあつたが、この朝ミ友田恭助君の亡くなつた時きは、眼鏡を拭いても拭いても曇るの

だつた。以下、尊い母堂のお言葉を抜書きして、今後も私自身に讀ませたいと思ふ。

「この子をもこの母が、天皇陛下様のお役に立て得たご聞いて母はどんなにもうれしかつたか。たゞ治郎にはこの母が腑甲斐ないばかりに貧乏の苦しみをさせて――ご情なく思ふばかりです。……」

治郎の父には治郎が四歳のときに日露戦争で勇ましく死別れ、それから後はたゞ女手一つで治郎を頼みに育て、來ましたが、貧乏な私なものですから、無茶な育て方しか出来ませんでな。私が治郎を中學へは上げられないご云ふご周圍がみんな承知せず、先生方の無理な勧めで高岡中學に入學させますご小學校の小使さんまでがよろこんで赤飯をたいてくれました。

私は補修科の裁縫や作法の先生をしてゐたものですから、治郎は學校から歸つて來ても家も開いてゐず、腹を空かせて一日家の外で私の歸りを持つてゐたごころもありました。こんな可哀さうなごころをさせまして、たゞ腑甲斐ない母ご思ふばかりです。治郎は伏木から中學まで二里の道を毎日日本を讀みながら通つてゐましたが、こんな苦勞も私が腑甲斐ないばかりにです。

「治郎苦しんだらうご慰めるご、「お母さんこそ苦しんだらう。僕は勉強はしたいしお母さんには氣の毒だし、そ

れを思ふごなほ苦しい」ご答へてくれましたぞな。子供にこんなごころを感じさせてごいまこの寫眞をみる度に口惜しう思ひます。……」

中學の二年ごろから兵學校へ行けば官費で勉強出来るからご云ひ出しましたが、四年生になるまで私は黙つて承諾の返事をしてやらないでゐました。たうごう四年のとき、ごうか許してくれご泣いて頼まれ、私も負けて許しました。するごある夜明けに裏でザッ／＼水の音がします。驚いて戸を開けて見るご治郎は頭からザー／＼水をかぶつて居ます。私は腑甲斐ない母よご泣けて泣けて仕方がありませんでした……」

私はこの一文を寫してゐてさへ泣けて仕方がない。この母にしてこの子ありごいふ感が深い。子供も母をよく知つてゐる。幼い頃からよく母を知つてゐる。母もよく子を見てゐる。私は、今、この母堂よりも遙かに貧乏をし、苦しんだ自分の母のこころを想ひ、胸がつまるやうな氣がする。私は六歳で父を失ひ、小學校は六年間に六度も轉學しなればならぬ程、あちこちへご拾はれて歩き、中學への入學も許されなかつた。やつご條件付で入學試験を受けても體格検査ではねられるごいふ憐れな子供であつた。私自身には感じられない數々の苦しさを母は味はれたごころであらう。醫者の息子ご生れた自分が寺へ入れられたり、神主の

家で養はれたり、キリスト教宣教師の下で牧師の修養をしたり、まるで落語にでもあるやうな青少年時代を過ぎたが、私は寝られぬ程苦しくはなかつた。今日では甘い過去の夢でさへある。しかし、母は夜も晝も私の事を考へて下さつたのだつた。子供の苦しみは一つ一つ母の苦しみである。母の苦しみは子の苦しみではないのに。その母も此の世を去つて今は七年。八月の十八日が命日であるが、「キトク」の報で、十五年振りに母の病床に馳けつけた私は「イマカヘル、マテ」に突飛な電文を送つた。果して母は私を待つてゐて下さつた。「保です、おわかりですか」さきくさ、頷いて、「嬉しい、こんな嬉しいことはない」さ言はれた。これが六十二年の最後の言葉であつた。ゲーテださか、ネルソンださか、ブラウニング夫人ださか、世界の偉人の臨終の言葉に就いては感心もし、考へもしたが、その深さ、尊さ、有難さ、母の言葉には及ぶべくもない。宇和島藩の名家の出でありながら全く子供の故に一生を貧しく過され、己を捨てて育て下さつた母に對して、私は何一つ孝行が出来なかつた。それなのに「嬉しい」さは！私は勿體なくて、有り難くて苦しい思をしてゐる。せめては今後子供の爲に苦しんで、その償ひをしてみよう。

御見舞

此の夏は諸地方風水害のこま多く幼稚園さしても御被害の方すくならず存じます。殊に神戸地方の御難儀如何ばかりさ拜察申上げます。誌上御見舞の意を表します。

日本幼稚園協會